国境を垣根とした偏狭性：サーベイ・データを用いた指標の導入とその分析例

影山純二[a]

要約

グローバル化の進展とともに，国境を垣根とした偏狭性（自国を贔屓する内集団バイアス，national parochialism）の合理性に疑問符が付くようになった．この問題に接近するに際し，従来の研究は実験的手法を用いて偏狭性を測定している．一方，本研究ではサーベイ・データを用いて測定する．サーベイ・データを用いることにより，サンプル数の増加，調査国の拡大，そして個人属性に関する調査項目の充実が見込めるからである．世界価値観調査および欧州価値観調査を用いて考察した結果，次の 2 つの結果が得られた．第一に，サーベイ・データを用いた指標は実験的方法を用いた指標と相関係数が高く，妥当と言える．第二に，偏狭性を個人属性に回帰した結果，性別，年齢，学歴，所得といった要因が偏狭性と相関している．回帰分析の結果は先行研究とも整合的である．これらの結果は，偏狭性を考察する上でのサーベイ・データの有効性を示している．

JEL 分類番号： D090

キーワード：National Parochialism, World Values Survey, European Values Survey

[a] 明海大学経済学部 kagejun@meikai.ac.jp
本研究は科研費の助成を受けている（17KT0037）.

1. イントロダクション

ヒトには，相手との社会的距離によって行動を変える特性がある．社会的距離が近いほど協調的となり，自分が属する集団（家族，国，宗教など）ほど利益を重視する．この特性は内集団バイアス（ingroup bias），内輪びいき（ingroup favoritism），偏狭性（parochialism）などと呼ばれて排他性の主要因と考えられており，心理学などの行動科学において 1950 年代より研究が行われている．

近年のグローバリゼーションの進展は，この偏狭性に改めて光を当てることになった．グローバル化された世界においては，内集団（特に自国）に過度に肩入れすることが不利になると考えられるからである．本研究ではこのような背景より，国境を垣根とした偏狭性（national parochialism）に焦点を当てる．

従来の研究では，国境を垣根とした偏狭性を測定するに際して実験的手法を用いることが一般的である（see, e.g., Balliet et al. 2014; Romano et al. 2021a; Romano et al. 2021b）．一方，本研究ではサーベイ・データを用いる．サーベイ・データを用いることにより，サンプル数の増加，調査国の拡大，そして個人属性に関する調査項目の充実が見込めるためである．具体的には世界価値観調査（World Values Survey, WVS）及び欧州価値観調査（European Values Survey, EVS）を用いる．

分析の結果，サーベイ・データを用いる手法の妥当性が確認できた．また個人属性に回帰した結果，性別，年齢，学歴，所得といった要因が偏狭性と関係していることがわかった．これらの結果は先行研究と整合的である．

以下，第 2 節ではデータとその妥当性について，第 3 節では回帰分析について述べる．そして第 4 節で結語を述べる．

2. データと妥当性

2.1. データ

本研究が用いるデータは第 7 回 WVS と第 5 回 EVS である．両者は 2017 年から 2022 年にかけて協同して行われ，第 3 版では 84 カ国の 147,260 人に対する調査結果がまとめられている．本研究ではこのうちコロナ前の 2019 年以前に調査が行われた結果を利用する．

この調査では，自分の住む市町村，地域，国，大陸，世界に対する親近感が尋ねられている．具体的な質問内容は下記の通りである．

> *People have different views about themselves and how they relate to the world. Using this card, would you tell me how close do you feel to [region]?*

調査対象者は，この問いに対し very close (4), close (3), not very close (2), and not close at all (1) の４つから回答を選ぶことを求められる．

本研究では，この親近感を社会的距離と捉える．そして５つの地域に対する親近感のうち，国と世界に対する項目を取り上げ，その差を国と世界に対する社会的距離の差，すなわち国境を垣根とした偏狭性（$-3 \leq np \leq 3$）と定義する．値が３に近いほど偏狭であり，世界を割り引いていることを意味する．一方，値が０未満の場合は自国を割り引いていることになる．

データ取得可能な 66 カ国を取り上げ，国境を垣根とした偏狭性の国別平均値を示したものが図１である．なお出生地が自国以外のサンプルは除外している．この結果，アゼルバイジャンが最も偏狭であり，次が日本となっている．一方，最も偏狭でないのはチュニジアとなった．一見のところ，どのような国が偏狭なのかその傾向は見て取れない．

2.2. 妥当性

次に本研究のサーベイ・データを用いた指標の妥当性を検討するため，実験的手法を用いた研究の指標と本研究の指標を比較する．具体的には，Romano et al. (2021a) が得た国境を垣根とした偏狭性の指標と本研究の指標を用い，それぞれの国別平均値が相関するか考察する．Romano et al. (2021a) を比較対象としたのは，この研究が 44 カ国を対象としており，実験的方法を用いた先行研究の中で最も多くの国々を包括しているからである．

結果は図２に示す通りである．日本（左上）とフィリピン（中下）が外れ値として現れるが，それ以外は素直な正の相関が見てとれる．日本とフィリピンを除いた相関係数は 0.6 を超える．この結果は，サーベイ・データを用いた指標の妥当性を示していると言えよう．

3. 回帰分析

それでは，どのような人が偏狭なのだろうか．上記のサーベイデータを用いた指標を被説明変数とし，個人属性で回帰する．説明変数は，出生地（調査国以外で出生，調査国で出生），性別（女性，男性），年齢（17-24 歳, 25-34 歳, 35-44 歳, 45-54 歳, 55-64 歳, 65 歳以上），学歴（大卒未満，大卒以上），婚姻状態（未婚，既婚，コーハビテーション，離婚，別居，死別），子の有無，所得（下位，上位），就業状態（就業中，退職，学生，失業中，その他），国ダミーである．サンプルは利用可能な観測値をすべて含めた場合 96,157 となる．手法は，係数の解釈の容易さを優先し最小二乗法を用いる．なお被説明変数は 2 つの親近感の差をとっているため，親近感と説明変数の間にある内生性は除去されていると考えらえる．

結果は表２に示す通りである．(1.1) 式はすべてのサンプルを含み，(1.2) 式は自国を割り引くサンプルを除いたものである．とくに自国を割り引くサンプルを除いた結果に着目す

ると，男性，高年齢（旧世代），低学歴，低所得，退職者，失業中，就業状態その他ほど有意に偏狭なことがわかる．社会経済状況という面では，不利な状況にいる人ほど偏狭な傾向が見てとれ，この結果は Hruschka and Henrich (2013) と整合的である．

4. 結語

本研究では国境を垣根とした偏狭性を分析するにあたり，サーベイ・データを導入した．そしてその妥当性を示し，偏狭性の個人属性別要因を検討した．結果は先行研究と整合的であった．

本研究の結果は，内集団バイアスを分析にするにあたってサーベイ・データが有効であることを示している．ただし実験的方法の方が優れた点もあり，両手法はお互いに補完的と言える．

今後の課題としては，まず他のサーベイ・データを用いた研究が必要と言える．WVS と EVS は，データの信頼性が問題になることもあるからである．さらに，一層の内生性バイアス対策が求められる．本研究では，親近感と個人属性の間にある一義的な内生性は除去したものの，偏狭性と個人属性の間にある潜在的な内生性には対処できていない．そして最後に，国別の偏狭性を説明するとともに，偏狭性がどうマクロ経済のパフォーマンスに関わるか理論的に考察することが有意義と言える．

引用文献

Balliet, D., J. Wu, and C.K.W. De Dreu, 2014. Ingroup favoritism in cooperation: a meta-analysis. Psychological Bulletin, 140(6), 1556–1581.

Hruschka, D.J., and J. Henrich, 2013. Economic and evolutionary hypotheses for cross-population variation in parochialism. Frontiers in Human Neuroscience, 7, 559.

Romano, A., M. Sutter, J.H. Liu, and D. Balliet, 2021a. Political ideology, cooperation and national parochialism across 42 nations. Philosophical Transactions of the Royal Society of London. Series B, Biological Sciences, 376(1822), 20200146.

Romano, A., M. Sutter, J.H. Liu, T. Yamagishi, and D. Balliet, 2021b. National parochialism is ubiquitous across 42 nations around the world. Nature Communications, 12(1), 4456.

表 1 回帰分析結果

	(1.1)	(1.2)
	all np	np>=0
Native (ref: non-native)	0.254***	0.027
	(0.034)	(0.019)
Male (ref: female)	0.016	0.035***
	(0.013)	(0.008)
Age class (ref: 17-24)		
25-34	0.027*	0.022*
	(0.016)	(0.013)
35-44	0.075***	0.049***
	(0.020)	(0.017)
45-54	0.097***	0.049***
	(0.022)	(0.016)
55-64	0.120***	0.059***
	(0.021)	(0.017)
65 and above	0.150***	0.061***
	(0.023)	(0.021)
Educational level: upper (ref: lower/middle)	-0.074***	-0.040***
	(0.015)	(0.009)
Marital status (ref: never married)		
Married	0.051***	0.005
	(0.017)	(0.012)
Living together as married	0.001	-0.003
	(0.018)	(0.015)
Divorced	0.028	0.010
	(0.019)	(0.013)
Separated	-0.039	-0.003
	(0.029)	(0.030)
Widowed	0.102***	0.063***
	(0.021)	(0.017)
Parenthood (ref: no child)	0.018	0.003
	(0.015)	(0.014)
Income class: upper (ref: bottom half)	-0.016	-0.016**
	(0.014)	(0.008)
Employment status (ref: economically active)		
Retired	0.069***	0.033***
	(0.016)	(0.012)
Student	-0.028	-0.026
	(0.022)	(0.016)
Unemployed	0.016	0.031***
	(0.012)	(0.011)
Other	0.012	0.043*
	(0.026)	(0.025)
Obs	96,157	55,750

Cluster-robust standard errors in parentheses. *** p<0.01, ** p<0.05, * p<0.1.

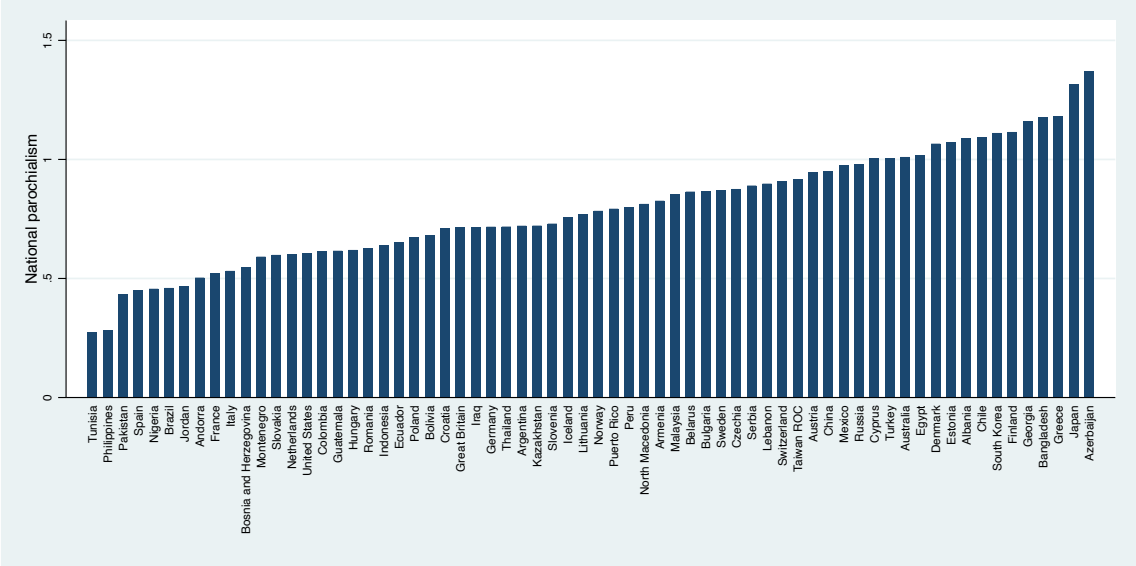

図 1 国境を垣根とした偏狭性の国別比較

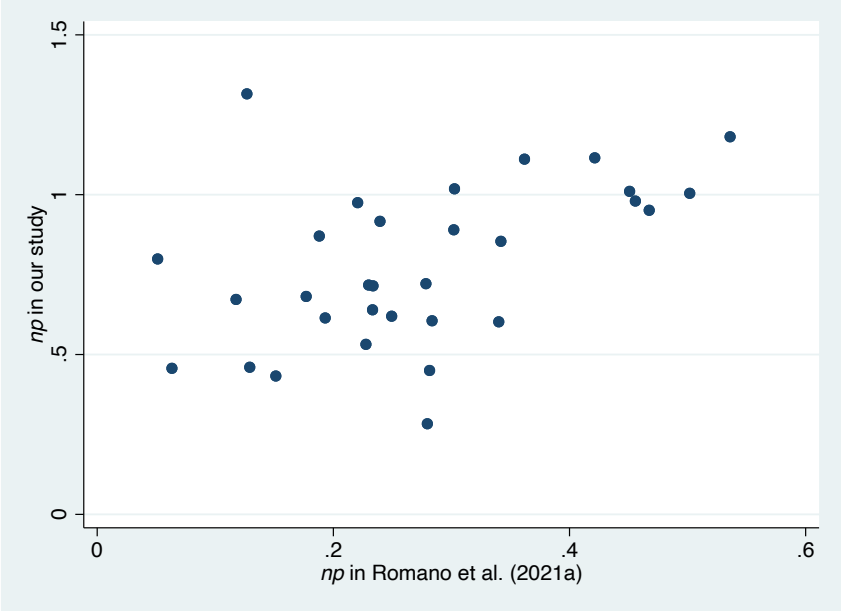

図 2 Romano et al. (2021a) と本研究の比較